

# 第15回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



中学生の部 優秀賞 受賞作品

『一步踏み出そう』

シンガポール

シンガポール日本語補習授業校

中学二年 土屋 千紘

一步踏み出そう

シンガポール日本語補習授業校 中学二年

土屋 千紘 (うちや ちひろ)

「思い切って一步踏み出せば、新しい景色に出会える！」

これは私が小学五年生の時に出会った言葉で、私の推しの言葉だ。私は大変な時にこの言葉に勇気づけられる。だから、多くの人にこの言葉を伝えて新たな希望を与えたい。

それは小学校のキャンプの二日目だった。午前中は空中アスレチックの時間で、クラスメイトはアスレチックをやる順番をわいわいとジャンケンで決めていた。だが高所恐怖症の私は参加する気が全くなかった。広場はサウナのように蒸し暑く、私は汗で額に貼り付いた前髪を横にはらい、あと何時間で家に帰れるかを考えていた。あと二十七時間。キャンプも残り半分だった。

「ねえ、私は七番目に登ることになったよ！ 順番決まった？」

友達が私の肩をぼんとたたきながら聞いてきた。私は慌てて顔の前で手を振り、

「えー、私はやらないよ。高所恐怖症だし。頑張ってね！」

と答えた。スタート地点にスキップで向かう友達に背を向けられた私がひとりぼっちで寂しそうに見えたのか、真っ赤なてんとう虫が突然私の人差し指に止まった。まるで私に、「行かないの？ みんな楽しそうだよ。」

と問いかけているようだった。上を見上げると、コースを最初に終えたクラスメイトが両手を広げ、興奮して足をバタバタさせながらジップラインで滑って帰ってくる。クラスメイトの鶏のような姿に私は思わず笑いながら、この小さな友達に、

「無理無理、高い所がどうしても怖くて。」

今日こそ頑張ろうと思ったが、地上三階建てほどの高さからぶら下がるタイヤや二本の柱の間に張られた蜘蛛の巣のような綱を見ると、やっぱりぞっと鳥肌が立ち、やりたい人として拳手しようとする手が引っ込んでしまった。

「どうして自分はみんなみたいに勇気を出して新しいことに挑戦できないのだろう。」

私は考えれば考えるほど、息苦しくなった。けれども友達に、

「行かないと損するよー！」

と言われ、私は最終的に挑戦してみることにした。だが、三秒後に自分の決断を後悔した。私は何度も命綱が締まっているか確認して、スタート地点までの階段を一步步登った。

スタート地点に着くとどうせやるなら早く終わらせたいとおもっていたが、下を見下ろした時、両足がピタッと止まって全く動けなかった。心拍数がどんどん速くなり、冷や汗をかき始めた。目の前の綱を掴もうと手を伸ばしたが、足がどうしても動かない。まるで強力な接着剤で地面に貼り付いたようだった。

つい数分前まで広がっていた真夏の青空が暗くなり、空一面が濁ったグレー色になっていた。先程まで吹いていたそよ風がいつの間にか強くなり、アスレチックを激しく揺らしはじめていた。今まで聞こえていたはずのセミの鳴き声も聞こえなくなっていた。

「まずい。このままだと雨が降る。どうしよう。」

小さな雨粒が私の鼻に落ちたその時だった。先生が私に向かって、叫んだ。

「思い切って一步踏み出せば、新しい景色に出会える！」

深呼吸をしながら、私は両手で綱を強く握り締め、一步踏み出し、一つ目の丸太に思い切

って飛び乗った。丸太は少し揺れたが、意外と大丈夫だった。命綱なんか切れなかった。「もう一步、あとちよっと。もう一步、あとちよっと。」

私は自分に吹きながら、アスレチックを全てクリアした。ジップラインも最初は緊張したが、先生の言葉を信じて、勇気を出して一步踏み出した。ターザンのように風を切る感覚はとても新鮮で、気持ちよかった。全てが楽しく、思ったより早く終わってしまい、もう一度やりたいとさえ思えた。

ゴールした瞬間、クラスのみんなが私に拍手をしてくれた。その時、私は気づいた。叶えられない夢や達成できない目標なんてない。何事も、最初の一步が一番大変で、一番緊張する。どこから始めるか分からず、迷ったり、怖くなって始められない時もある。だが、そういう時は取り敢えず一步踏み出し、挑戦することが大事だ。どんなに小さな一步でも、その一步さえ踏み出せば、新しい景色や今まで知らなかった楽しいことが待っている。

なりたい自分に一步近づくために、今日も勇気を出して一步踏み出したい。そしてもし周りに新しいことに挑戦することをためらっている友達や知り合いがいたら、この私の一推しの言葉で希望のエールを送りたい。